LC
りぽーと
Vol. 29

〒663-8558　西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL　0798(45)3536
FAX　0798(45)3574
http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC

2009年度　イベントあれこれ

2009（平成21）年度の言語文化研究所は、大小取り合わせたイベントを例年よりも多く開催した一年でした。

当研究所と学会との共催あり、ＬＣ倶楽部の皆さんとのおしゃべりの会あり、テレビ会議形式での研究会あり、全国レベルの学会・研究会の準備など、ひとつが終われば、ハイ次！という感じで、まさにイベントづくし。イベントに明けイベントに暮れた2009年だったように思います。

そこで、今回のリポートは、今までとは趣向を変えて、この一年、言語文化研究所が行ってきた対外的な活動について写真を交えながら報告します。

+。:.゜.:。++。:.゜.:。++。:.゜.:。++。:.゜.:。++。:.゜.:。++。:.゜.:。+

■第18回「言語文化セミナー」（第21回「ことわざフォーラム」）
2009年11月28日（土）午前10時から午後５時20分

ことわざ学会と言語文化研究所との共催で、第21回「ことわざフォーラム」を行いました。これは、例年開催している「言語文化セミナー」の拡大版です。

午前中は、研究発表が２件とことわざ学会の総会、午後は、研究発表３件に続いてシンポジウムという流れでした。

シンポジウムのテーマは「ことわざの多様性」。ことわざは、意味に関しては、「善は急げ」と「急がば回れ」のように、意味の相反することわざが存在したり、「犬も歩けば棒に当たる」のような、複数の解釈が可能なことわざが存在したりします。また、ことわざがカバーする領域も、天気、農業・漁業から処世術まで広範囲に及びます。

さらには、ことわざを使う目的も、他人の評価・皮肉・批判・説得や自己主張・納得など実にさまざまなようです。

このように多様なことわざについて、みんながそれぞれ自分の思いや考えを述べ合い、ことわざを再認識しようというのが今回のねらいでした。

以下に、シンポジウムで発表された内容をご紹介します。

(1) 武田勝昭氏「ことわざのもたらす言語経済効果」

「ことわざは論理的だが情景・状況に依存するため、類諺が多くなって多様性が生じる」「命題の根拠が示されず、問いを投げかけるものがあり、そこに解釈の多様性が生まれる」「ことわざは日常の情景・状況を網羅して多様な世界を描くために多様性が存在する」と指摘された。そして、ことわざは、言語活動を広くカバーして、多様なコミュニケーション場面で短い表現で寸鉄人を刺すほどの効果を上げるもので、まさに言語経済、言語省エネの代表格と言えると主張された。言語経済効果という切り口は新鮮で、ことわざの本質に迫る視点である。

(2) 保阪良子氏「ことわざの身体性－歌舞伎、ミュージカルを例に」

ことわざは、口承性を重視すべきこと、実際の使用面で取り上げることの重要性を指摘された。本来口承であったことわざが、文字で記されるようになった過程で、多様性を帯びると同時に、失ったもの、忘れられたものがあるのではないかという問題を投げかけられた。ことわざは、コンテクスト、場面性と同様に、声や表情といった身体性が重要な要素であることを認識すべきだとして、歌舞伎「毛抜」やミュージカル「レベッカ」の一場面をDVDとCDで実際に紹介された。紙上で読むことわざと目と耳を通すことわざとの違いが実感できて楽しかった。

(3) 渡部修氏「ことわざの型」

「枕詞型」と呼ばれる上代のことわざにも、「しゃれ型」とでも言える近世のことわざにも、掛詞が重要な役割を果たしていると指摘された。その掛詞を通じて、日本人のことわざに対する観念の一部を明らかにできるのではないかと問題提起された。また、「漢文訓読・四字熟語型」からは、日本人の漢籍信奉の意識を読み取ることができるので、この型のことわざの有り様を分析することで、それらのことわざに対する日本人の意識を検討する一端になり得るだろうと述べられた。ことわざの型を通して日本人の意識をとらえようとする発想はユニークである。

(4) 松村恒氏「中国起源のことわざの多様な解釈の起源」

日本で、中国起源のことわざ成句を使ってきた間に、形態だけでなく意味内容でも本来のものとは違ってきているものがあることを指摘された。そして、その変化は、ことわざが本来的にもっている多様性によるという仮説を、「泣いて馬謖を斬る」「他山の石」を例に挙げて話された。つまり、民衆がことわざを使用するとき、その場その場に応じた使い方を許す許容度をことわざがもっていたからではないかと述べられた。ことわざの多様性の原因を、民衆の使用のあり方や意識に求めるという考え方は、他の３人の発表を結びつけるもので興味深かった。

■第１回「ことばのサロン」
2009年10月30日（金）午後１時30分から午後２時30分

気持ちのよい秋晴れの中、午後１時30分より第１回「ことばのサロン」を開催しました。「出席者の皆さんに日本語についておしゃべりを楽しんでもらおう」。サロン開催の趣旨は、一言で言えば、そういうことです。

毎年開催している「言語文化セミナー」では、議論がさあこれからというところで終わりというスタイルが多く、参加者からの意見を十分に伺う時間が少ないのが現状です。時間がもう少しあればなおよいのにと思うこともしばしばです。

そこで、セミナーとは別の機会を作り、参加者の皆さん（特に、日ごろ研究所の活動にご協力くださっているＬＣ倶楽部会員の皆さん）に、日本語について思う存分おしゃべりをしていただき、楽しんでもらえる場を設けたいと研究所は考えました。それが「ことばのサロン」です。

記念すべき第１回は、所長の佐竹が「人の呼び方」についてのお話をして、そのあと、おしゃべりタイムと相成りました。36名の申し込みがあり、当日は、30名が集まってくださいました。

西宮市立西宮今津高校からは、ＬＣ倶楽部会員でもある国語科の先生が４名の生徒さんを連れて参加してくださり、高校生の皆さんが、若い世代代表として活発に発言してくれました。

テーマの「人の呼び方」については、「家族をどのように呼ぶか」という点に皆さんの興味が集まりました。さすが、経験豊富な（？）皆さん、自分の連れ合いについて、兄弟について、親戚についてと、あちこちから声が上がり、ご自身の体験をまじえて話がはずみました。

ご年配の参加者からは、自分の子どもからどう呼ばれているか、さらに、孫からはどう呼ばれているかというお話も聞けました。

また、夫婦の間でどのように呼び合うかという話題では、ある出席者が、「結婚当初は、お互い名前で呼び合っていたけれど、子どもが生まれてからは、「お母さん」「お父さん」に変化した。子どもが結婚して、また二人の生活に戻った現在は、もう一度名前で呼び合うように変えようと話し合った」という経験談を披露してくださいました。

存分におしゃべりを楽しんでもらえたようでしたが、中には、まだまだ話し足りないという人もいて、予定していた２時間があっという間に過ぎてしまいました。

第２回目のテーマについては、現在検討中です。次回を楽しみにお待ちください。

■第25回、第27回「メディアとことば研究会」
2009年６月20日（土）／ 12月５日（土） 午後３時から午後６時

「メディアとことば研究会」は、2003年３月に発足し、年４回の研究会を行っています。そのうち２回は、社会言語科学会に連動していて、原則的に学会開催の大学を会場としています。あとの２回は、テレビ会議の形式で、関西会場の武庫川女子大学と関東会場の東洋大学とを電話回線で結んで行っています。当研究所は、関西会場校の担当として、スムーズにテレビ会議が行えるよう協力しています。

2009年度のテレビ会議は、第25回６月20日（土）、第27回12月５日（土）に開催されました。第27回の関西会場の発表者は、本学日本語日本文学科助手の設樂馨さんで、「文字テロップと視聴者意識」という題で発表しました。なお、このテレビ会議を開催するにあたっては、回線の接続など技術的な面で情報教育支援課の協力をいただいています。

■2009年春季　日本語学会　2009年５月30日（土）、31日（日）
■日本方言研究会　第88回研究発表会　2009年５月29日（金）

日本語学会は、日本語学（国語学）研究者の全国的な集まりで、春と秋の年２回、全国レベルの学会が行われています。また、日本方言研究会は、日本語学会の前日に開催されるこちらも全国的な研究会です。

2009年春季の学会、研究会は、武庫川女子大学が開催校となり、言語文化研究所のスタッフが事務的な諸事を担当することになりました。研究所では、前年の2008年からさまざまな準備に取り取りかかっていましたが、2009年春先より新型インフルエンザが流行し、特に、関西地区では、一斉休校の措置が取られる大学が出始めました。これを受けて、日本語学会理事会は、2009年５月18日、学会員の安全確保、また、感染拡大を防ぐため、公式に開催のとりやめを決定しました（日本語学会（2009）『日本語の研究』５巻３号（238号）pp.164-165より一部抜粋）。また、日本語学会前日に開催予定だった日本方言研究会も、日本語学会と同様、５月の開催は取りやめとなりましが、こちらは、2009年10月30日（金）まで延期し、第88回と第89回をあわせた研究発表会が島根大学にて開催されました。

――振り返ってみて――

それぞれのイベントにご出席、ご参加くださった皆さんに、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。行き届かない点、準備不足でご迷惑をおかけしたことなど至らないことがいろいろとあったとは思いますが、どうかご容赦くださいますよう。

しかしながら…、なんと気分的、体力的に慌しく大変だった2009年かと思います。わずか２人という少人数で各イベントに対応するのは、小回りが利き、フットワーク軽く動ける利点がある一方、マンパワー不足ということは折に触れ痛感しました。スタッフの一人（C.K）は、精神的にはまったく問題なかったものの、体の方が反応してジンマシンが出るというオマケ付きでした。

担当：佐竹秀雄・岸本千秋　2010年１月